



お目にかかれて満足です

田辺聖子



中央公論社

お目にかかれて満足です

定価一三五〇円

©一九八二

昭和五十七年一月二十日初版発行  
昭和五十七年七月十五日四版発行

著者 田辺聖子

発行者 高梨 茂

印刷 精興社  
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二丁目一七

振替 東京二三四

検印 廃止

日本音楽著作権協会(出)許諾  
第八二一〇六一二号

お目にかかれて満足です



ゆうべ、洋は心臓がドキドキする、といって、夜中に私を起した。

「苦しいよ、何とかせえや、オイ」

何とかせえや、といったって、どうしようもない。私は医者じゃないんだし。

でも彼の心臓に手を当ててみると、ほんとうにドキドキと脈打っていて、私、人間の心臓がこんなにドキドキするものだとは全く知らなかったから、

「ホントだ！ うんと早いぞ」

と感心した。そうして私は、自分の脈搏とくらべてみたい、という誘惑に勝てず、洋の心臓に当てている手首

を、片方の手でさぐり、脈に触れようと試みた。でも、医者でも看護婦でもない私は、脈のありかがよくわからなかった。

（おかしいな、脈がないはずなのに……）

その間も、洋の心臓は大あばれ、大いそぎといったふう

に、  
「ドク、ドク、ドク……」

と早鐘を打っていた。私はマスマス、自分の平静な、健康な（と思われる）私の脈搏とくらべて、その異常度を知りたくてたまらなくなった。これは洋の身を案じて、というより、純粹な好奇心から、というのに近い。

それが洋には分ったとみえて、

「オイ、何しとんねん……背中さするとか……『西宮』（さいのみや）へ電話するとか……あ、苦しい、……何とかせえ！」

息もたえだえに叱りつけた。

ベッドの枕元のデジタル時計を見ると、午前一時だった。こんな時間に「西宮」へ電話して、ホントウの急病、大病ならいいが、もしいたことがないなら、どうしてあとのつづまりをつけるのだ。「西宮」というのは洋の長兄で、産婦人科の病院をやっている医者（いしや）の海太のことである。どこの家でも親戚を呼ぶとき、そういうこと

が多いように、ウチでも、地名で呼んでいた。

親戚だけに、かえって急場ときは頼りにくい気味がある。ただ、洋も実際に電話をかけて往診をたのむとか、指示を仰ぐとか、いうよりも、イザとなれば「西宮」へ電話したらいい、ということまで心の底に、かすかな安心感をもっており、それが口へ出てくるらしい。西宮は産婦人科なのだから、心臓ドキドキとは関係ないのだ。

「フーム、フーム……」

と洋は喘いだ。まだ、彼の心臓は、めざましく、ばたばたと荒れ狂っていた。

「ハァ……ハァ……」

私は洋の背中へ手を廻して、撫で下すことにした。

（何ともないだろう……）

という樂觀と、

（大丈夫だろうか？「西宮」へちょっと電話して、聞いてみようか？）

という気と半々である。どうしていいか分らない。

こういうとき、私はいかにも自分で自分を、

（――物の役に立たない）

人間だ、とつくづく思ってしまう。

私という人間は、二カ月前、三十二になったのだが

（夫の洋は五つ年上でこれは六カ月くらい前、三十七になった）三十二になったと決して大きい声でいえぬ、妙ちきりんな所があるのだ。

三十二といえば、世間ではもう、リッパな中年で、思慮分別、貫禄威厳のそなわった堂々たる社会人である。

人前でハッキリ意見をいい、

（それはマチガイでございますわ）

（イイエ、こうしたほうが）

と的確に指摘できるはずなのだ。

三十二のオンナがまかり通る所、紅海の水が二つに割れてモーゼを通したように、人々や世間は、サーッと道をひらき、うやうやしくあたまを下げるもの、という認識が私にはある。

小学生や中学生の子供の教育について明確な理念を持ち、もと大臣の汚職について厳正な批判が出来、総選挙の結果について、街頭録音のマイクを向けられれば、  
「……それはこうじゃないでしょうか、つまり、でございますね」

と日本の政治状況を分析できる。

夫の職場における働きを内から支え、上司の家庭への社交とか、同僚部下のもてなしとか、そういう、いろん

なこと（私はしたことがないので想像もつかない）ができる。

そういう年頃ではないだろうか、三十二、って。

まして夫の急病、という急場のことになれば、右か左か、迅速果斷な決断ができるのではないかと、私は少なからぬコンプレックスを感じている。私は、どうしていいかわからないのだ。

こういうとき、ホントにこまってしまう。

オトナになりきれない自分、というものを思い出させる機会を強要した洋に、憎悪を感じてしまう。

まあ、そんなにまわりくどくいわなくても、常に、私が看護するほうにまわり（というほどのことは何にもできないが）自分が病気になってしまうほうを選ぶ洋に、ハラを立てているといってもよい。

（タマには、私が「心臓がドキドキする……フーム、フーム」といつてみたいもんだ）

と、私は恨みがましい目つきで、洋の、横向けに寝ている首筋をみていたりする。私の方は、いたって頑健でかつて風邪さえ引いたことがなく、まして夜中に心臓がどうの、ということなんか、皆無だった。それに、たとえ私がそうなくても、洋はめったに起きてくれるわけ

はなく、

（あした、会社があるからな）

と、うるさそうに寝返り打って、すやすやと寝てしまふ、私はいつだか夜中に、きりきりとおなかが痛んで辛いことがあったが、

（洋。おなか痛いよ）

と小さい声で訴えた返事がそれだった。私はそのとき、一生けんめいで起きあがり、痛むおなかを押えながら、やっとの思いで薬を服んだ。そういえば、もう二年ほどまえ、急性のはげしい膀胱炎をおこしたときも、壁を伝わって匂いながらトイレへ起ったり薬を服んだりした。

洋が起きてくれないとわかると、私は自分で辛抱するのだが、その辛抱が、どこまで辛抱してよいか、よく分らないところがある。もう、辛抱しきれない、堪えられない、というところがなく、いくらでも堪えてしまう、こういうものだときらめれば、堪えるところがある、これはどういふのであろうか、つまりは鈍い、ということだろう。それに、辛抱に歯止めがないのと同じで、甘えるにもトメドがない気がするのだ。

どっちにしても、私には、きちんとした見識がなかった。歯医者などへいって、

「痛かったら、痛いと言って下さい」

などといわれるのは、いちばん、私は困るのだった。痛いのはずーっと痛いだし、どのへんから痛いといっているのか、それを教えてもらわなければわからなかった。辛抱するのは、私はいくらでも辛抱してしまうのだから……。

そのへんも、私には、自分で自分を不安がらせるものである。

三十二にもなれば、仕事をしている女の人はいかだのものになっていだろうし、金を儲けている人は、がっちり抱えこんでいるにちがいない。

そういう人は、歯医者に向って、

「痛い！」

と牽制する、つまり（ここからは堪えられない！）という毅然たる制限をわきまえているのだ。私はいたずらにトシばかり食って、そういうことがさっぱり、できなかった。

そういうものは、いったい、皆はどこで教えてもらうのだろう？

でも私だって、そんなに浮世離れたお育ちではなく、仕事を持っているのだ。二十五歳までOLぐらしをして

いた。

二十五で会社をやめて、それからは好きだったので手編みのあみものに凝り、それを友人の松尾多根子<sup>たねこ</sup>の店で売ったりしていた。「るみ子セーター」なんて名をつけて売ってくれたのは多根子である。自分でお金をかせぐということも知っていて、いままかせいでいるのだ。私のセーターには、ファンもつき、「るみ子セーター」は、いまま注文が引きも切らず、なかなかさばききれない。（何しろ手編みだから）お金も、かなり貯めているのに、それでも私は、識見分別がつかない。

何でもないときには、べつに不自由はないし、ボロも出てこないが、

「夫が発病したとき妻は」

などという、婦人雑誌の目次みたいな場合になると、うろたえてしまうのであった。

ところがそのうち、気がついてみると洋は、

「フーム、フーム」

がいつのまにか、

「スウ……スウ……」

になっているではないか。

いそいで、洋のはだかの、熱い胸へ手をあててみると、

まだドキドキと暴れてはいるものの、少し、間遠になっている気がされる。

「ちょっと、なおったみたい……」

と小さい声でつぶやいたのに洋は耳ざとく聴きつけて、「いや、なおってへん」

とハッキリいい、また、「フーム、フーム……」とうなり出した。

それが、二、三分すると、

「スウ……スウ……」

とまごうことなき寢息になっているのだ。

このまま、そっとしとけば、おちつくかもしれない。

私が静かに手を抜くと、洋はまた、目を瞑ったまま、

「オイオイ、まだ、苦しいねんで」

と文句をいった。たしかに寢息をたてていたのに。それとも夢うつでいっているのかもしれないが。

それでも一時間かっきり、私は撫でたり、さすったり、していた。そうして、気がつく、洋はぐっすり寝込んでおり、鼓動はやや早くはあるものの、かなり正常になり、平常のおちつきに近づいていて、取り乱したことを恥じるように、小さくなっている感じだった。

夕方、洋はすこし飲みすぎじゃないか？ というよう

にみえたので、急性アルコール中毒とでもいうべきものかもしれない。洋はふだんはほとんど酒を飲まない。ビールをコップに二杯飲むと、おそろしく赤くなってしまう。体調がいいと、時に、水割を二、三杯飲むけれども。

そうして私はといえば、これまた痛みと同様、どのへんでお酒をおいていいのか、よくわからないのだった。いい気持になるが、それ以上、前後不覚になったことはなく、何より、へべれけになるまで酔ってみたことがないので、まだお酒の限度をためしなことがなかった。洋といっしょになって、もう六、七年になるけれども、私は洋と同じくらい飲み、洋がやめると私もやめると、いう風にしていたので、お酒のほうは未開拓のままだった。もしかして私は、すごいお酒飲みかもしれないし、あるいは、ちょうどいつも、いいところでお酒をおいているのかもしれない。

それにしても、「スウ……スウ……」と快さそうにねむっている洋の、安らかな顔や、放恣に投げ出された体は、私にいつも、洋の小学生時代、それからずっと前の、幼児時代を思わせる。洋はたいいとき、病気になる私を叩きおこし、

「なんとかせえ」

というのだが、それは子供のとき、体具合がわるいということが自分でも分らず、ぐずぐずと不機嫌になり、泣きべそをかいて母親のエプロンに顔をおしあて、怒り泣きしていた、そういう洋を思わせるのだった。私はそんな風に甘えられるのがきらいではないので、「お母さんごっこ」をするのが悪くない気持だった。

私が撫<sup>な</sup>ってやると、洋の異状はたいいてい、いつとなく納まり、今夜のように快さそうに「スウ……スウ……」でおしまいになるのだ。

撫<sup>な</sup>ったって直接の効用はないのであろうけれど、洋にとっては安心できるらしい。

ただ「お母さんごっこ」も、私の気分によっては、  
(何だ！)

となるところがある。

私は眠りたがりなので、眠いときは洋が何をどういったって、知ったこっちゃなく、わざと眠りこんでしまふ——すると彼は、私の顔を指で上下、押しひらいてわざと開けようとする。そのとき私が、目をひらいて、

「アハハ」

と笑って、

「しょうがないなア」

と起き、

「どこが具合わるいの」

といえは、洋は大よろこびなのだった。でも私が強情に眠りこむなり、大っぴらに「うーん」と撥ねつけてあくまで自分の睡眠を大事に護ろうとすると、洋の怒りを買う。

「あ、そうか、ようし、そんなら、ええから」

と洋はいい、あてつけらしく唸りつづけている。泣き寝入りというのがあるとすると、洋のは唸り寝入りだった。そうなったあとは、ご機嫌を直すのに手間ひまのかかること。でも私は、何しろ自分に自信がなく、識見がないので、こうやったらなおる、という見通しも手だてもなかった。翌朝になっても、洋がブーとむくれたままでいると、私の方が、

(おそれ入りました！)

という感じで、うなだれているのだった。

そうして、こんなにこまった立場に立たされて切ない思いをするくらいなら、いくら眠くても、あのときどうして起きなかったか、と悔むのであった。

それで洋が苦しいとき、気分わるいとき、夜中に私を

起すのも、私に母性的包容力があって頼もしいから甘えているのではなく、その代用品ともいふべきものとして、手頃なのが手近にあるため、使っているという、感じだった。私は「お母さんごっこ」は好きだが「お母さん」になるほどの度量はない、といったところである。

翌日になると、洋は全く元気で、（ゆうべ何かありましたか？）という顔で起きてきた。

私のほうは、あれからちょっと寝つけなくて、三十分ばかり、枕元のデジタル時計が、「ハタ……ハタ……」と時刻を指折ってゆく音をきいていた。（暗闇の中での、そのひそやかな音は、ちょうど蛾が羽を打ち合せるような音にきこえる）

洋は光り輝くような顔でいる。髻を剃ってツルツルした顎だった。トーストを二枚、半熟卵に、うすいアメリカンコーヒーを二杯、それに、サラダなどの生野菜は、（オレ、ウサギちゃう）

といって嫌うので、夏のあいだはぬか漬、そのほかは一押しした塩漬けの胡瓜や大根などを食べる。

洋は、夜中に甘えるほかは大体、健康なので、朝は上機嫌である。

私は、洋の好きなものが、みんな沁みついて伝染して、

食べものの嗜好も似ていた。アメリカンコーヒーを、私も二杯飲む。洋はあわただしく食べ終えて、「時間あるかなあ」

といいながら、椅子から立ち上り、私の毛糸で編んだドレス（自分の製作になるもの）の衿もとから手をつこんだ。

「いま何分や？ まだ大丈夫やろ」

と洋がいうのは冗談である。

「ちょこちょこっと、済ませ。愛のご挨拶」

というとき、私がいつも笑うから、洋は私を笑わせたいときは、そういう。でも、ほんとにそうしたいときは、そんなことをいって笑わず、まじめである。男は寝るときは、笑って寝ないものである。いつか、友人の多根子は「知らないもの同士が寝るときは、笑いながらするのがいちばんいい」といっていたが、それは照れかくしである。夫婦ものというのは、照れかくしをする必要も、照れ笑いをする必要もないので、まじめになる。

まじめになる、というのは、相手の思惑なんかかわらないで、欲望にだけ、忠実になるからだ。そうして欲望というのはわがままで一心不乱なところがあるから、しゃべることも笑うことも要らないってわけ、私は、洋と

結婚して六、七年もたってはじめて、「夫婦のまじめさ」に気がついた。六、七年もたったから、まじめになったのだ。

結婚したてのころはよく、ゲラゲラクスクス笑いながら、楽しんだものだけれど、いまは、ホントにやるときはまじめである。

やらないで、冗談をいつているときは笑っている。

「よく、そんなことをいいますねえ。ゆうべはどうでした？ ヒイヒイいうて、死ぬか、思うたわ。——『西宮』を呼べ、だとか、さすれ、とか。もう、すっかりなおったのね」

私がいうと、洋は手を引きぬいて興ざめ顔で、

「今まで低級な話してんのに、そう急に高級な話をされたら困りますなあ」

「ドキドキ、ドク、ドク……って、ドラムみたいに鳴ってたわよ、あれは何ででしょう、この前みたいに急性アル中かなあ。息たえだえなのを、あたしがやっと撫さってなおしたんだ、その心臓は」

「朝からそういうこというな、って。暗示受けるやないか」

洋は自分の体（ひいては精神）の変化に敏感で、ほん

とに、聞きたくなさそうだった。

ムクムクとしてやや太り肉の大男が、体調の変化におびえていたり、細心の注意でこれれもののように体を扱っているのは、私にはいつまでたっても慣れず、揶揄のたねだった。

私は自分が健康なので、自分の心臓も肝臓もどこにあるかさえ分らなかったから、平気で体のことをいう。

「ねじを巻きなおしとけばいいわ、その心臓、七日巻きのよ、きつと。このまえ、ドキドキしたのは、一週間ぐらい前やなかったの？」

「うるさい！」

と洋はプリプリして出ていった。でもそれも冗談で、

彼は、

「そんなら今晚、ネジ巻いてな」

と靴をはきながらいふのだった。

「どこを」

「エッチ」

なんていって洋が出ていくとき、私はほんとに洋が好きになる。多根子は洋を見て、

「甘ったれやな」

といったことがあったが、（多根子は勘のするどい女

なのであるが）それでも、オトナの見識のない私にくらべると、洋はやっぱりずっとオトナだった。洋は私と二人きりの時は、安心して紐をほどこしているが、さすがに男だから、外へ出ていくときは、トシ相応に紐（何の紐か分らないけれど）をきりと結んでいる感じである。

いつか多根子が、私に店を持たないかとすすめたことがあった。元町に小さい店があって、そこで「るみ子セーター」を専門に売ればいい、応援したげる、というのだ。資金はこれこれあればいい、といってくれたので、私は洋に相談した。そういうときの洋は、あれこれ調べてくれて、資金は何とかなるが、採算がとれるまで、「かなりしんどい」という答えを弾き出してくれた。彼は甘エタでも甘ったれでも、とにかく外へ出て、儲けた損したの社会で揉まれているので、経済のバランス感覚はあるようであった。

また、人の借金、保証人のハンをおすこと、就職の世話にも、いちいちちゃんとした、オトナの判断を下した私である、いやだと思いつながらでも、ずるずるに引っぱられてしまう、そうしてあとで浮かない顔をしてるのであるが、洋は平気で断ることができた。私も電話でなら断れるのであるが、洋は目の前で、

「いや、わるいけど、それは一つ、かんにんしてもらわれへんやろか」

とにこにこしていった。

そうして私が目をつぶりたい感じで、おそろおそろお茶を持ってゆくと、洋と客人は、たがいに談笑していた。客が帰るとき、洋は玄関まで送っていき、

「ほな、叔父さんよろしーに」

とか、

「まあ、しっかり」

なんていって、送り出すのであった。

そしてべつに、客に怒ったり罵ったりせず、

「風呂、沸いてるか。いやメシ、先にするか」

と私に、いったりした。

私は、にっこり笑ってことわる、という、そして相手の気を悪くさせずにことわる、などというオトナの芸当は出来ないのだった。

それでもって私は、判断のつかないことは、

「主人に相談いたしました」

と答えることにしていた。そのチェがでてきただけ、オトナになったのかもしれないけれど。それに「主人に相談いたしました」というのはいかに、オトナオトナ

してきこえて、嬉しいのだった。私はそれを連発しており、そのため、洋にも世間にも、

（自分では、何ひとつ、何にも出来ない女だ！）

と思われている。だから洋も安心して私に、夜中、どこか具合がわるくなると、（何とかせえや）と甘えるのかもしれないが。

そうして洋は、世間では、男一匹、ちゃんとした中年の、シッカリした、相応の位置にいる社会人通っている。「甘ったれやな」というのは多根子ぐらいのもので、洋は大阪の、まっとうな化学会社につとめている、中年のサラリーマンとして、ごくふつうの意味での尊敬を払われているのである。

いつか、コソ泥が、私たちの家へはいったことがあった。

私たちが住んでいる東神戸のこの家は、もともと洋の長兄が相続したもので、私たちは家賃を払って住んでいる。木の羽目板をめぐらした、異人館風なつくりであるが、天井がたかくて寒く、それにどこもかしこもたてつけが悪くなっている。窓が多いので、たいそう物騒なのであるが、路地の奥にあるので、ふつうはちょっと人目につかない家なのである。

二階にいた私が、何げなく下りてみると若い男が台所のまん中にいた。私はとっさに泥棒だ、と直感したが、もしかして、訪問客だったらいけないと思い、微笑を浮かべようかどうか、そう迷っているうち、顔は不随意筋のように、ニヤツとゆがんで笑っていた。

若い男はきよろきよろした。

そのとき、庭に通じるフランス窓から洋が、これも何げなくはいってくるなり、

「誰や！ こらッ！」

と大声でどなった。

私でさえビックリするような、鋭い叱咤だった。若い男は文字通り、空中へ一ぺん飛び上り、ぎゃっという感じで横っ飛びに逃げた。玄関のドアも門もあけっぱなしで、どっちへいったか、一瞬のことで影も形もなかった。「どこへいきよってんやろ」

門まで追いかけた洋は、息を切らしながら戻ってきた。

「オイ、何も盗られたもん、ないか」

何も盗られていなかった。

「何をボワーンとしとんねん——泥棒におじぎしとオる。バカッ」

洋は私を叱った。しかし私にしてみれば、泥棒だと直

感したけれども、もし違ったら失礼に当る、と考えめぐらせたのだ。そういう感情操作がなくて、一瞬すぐ、泥棒を大喝できる、最短距離のすばしっこさが、私にはオトナというものであるように思えたりする。

私と洋が知り合ったのは、洋の叔父サンのせいであった。叔父サンは、父の先輩だった。

私の父は、大阪の東成区で、小さな医院を開業している。あるとき急に、先輩の医者がたずねてきた。父はびっくりして、歓待していた。赤ら顔の太った初老の先生で、無口であった。父としばらく同じ病院につとめていたということだ。

「何十年ぶりですかね」

と父は喜んで、昼間だったが、お愛想にウイスキーを出していた。

平日だったので、父は夜間の診察があった。看護婦が父呼びにきた。そのときでも、先生はまだ腰をあげなかった。もう、三、四時間、居間に坐りつづけていた。私の母は困惑して、私に、

「どうしよう」

という。私は母のかわりに出て行って、先生のお相手をした。

「先生、父は失礼して、診察室へいきました。ごめん下さい……おつぎしましょうか」

私は、ウイスキーをついだ。私がそういうと、先生は、きつと（もうそんな時間ですか、失礼いたしました）と腰をあげるかと思っただのだ。医院の玄関では、赤ん坊の泣き声がきこえて、ざわめいていた。私の父は小児科の医者だったから。

「ああ、そう……。たいへんですなあ」

先生は動じないで、ゆっくりとウイスキーを飲んでいった。そうして、おちついて、

「江間<sup>えま</sup>くんと私は、その昔、大学病院で……」

と、もう十ぺんくらい聞いた、父との交友のあれこれを、また、しゃべりはじめるのであった。

ウイスキーは、もうほとんど空になっていた。たしか父は、まだ新しいのを封切ったはずだった。

先生は、目の色が濁って、どことなく、酒がまわりすぎた不気味な気配をただよわせていた。といって、決して兇暴な感じはなかったが、私には、奇異な印象だった。先生は、グラスをからにした。

そうして、じっと考えこむごとく、催促するごとく、目をつぶった。先生は、質のいい背広をきちんと着こな

し、舶来らしいネクタイをしめ、どこにもへんところはなかったが、それでも、じつと腰をおちつけているのが、どうにもふしぎな印象なのであった。

父はじめ何十年ぶりの先輩との再会、というので、一生けんめい、歓待していただきたいが、三、四時間をもてあつかいかねて、逃げるように診察室へいったのだった。

それで私が、診察室へ入って父に、

「お父さん。まだ、あの先生、いらっしゃるけどどうする？ ウィスキー、あけてしまいはった。もう一本、あける？」

といったとき、温厚な父は泣き笑いのような顔をした。父もどうしていいかわからぬようであった。

先生は、誰もいない、酒もなくなった居間で、ひとり瞑目して、体をゆらゆらと揺れさせていた。

そのとき電話があつて、

「江間小児科ですか？ あのう、叔父がお邪魔していますか？ 申訳ありません、僕、迎えにいきます」

といったのが、洋だったのである。先生はすこしアル中の気味で、それを知っているまわりの人々の所へはゆかずに、知らない昔の知人を訪れてまわっているようであ

あった。

洋はそのあと、お詫びに何べんも来た。

「僕トコ、親父も兄貴も、下の弟も医者です。僕は出来が悪うて、あきませんでした」

などという。

「ウチの父は、いまに医者だぶついて、医者就職難になるといっています」

私はそういって、なぐさめた。

「僕も、そう思ってます」

と洋はニタツと笑い、とても可愛らしい顔であったのだ。しかしそのときの印象では、アル中の叔父サンを抱えていった恰好が、とてもシッカリしてみえた。あとで考えると不意の<sup>こんやう</sup>闖入者に対して、すぐさま反射的に「コラッ」といえる、シッカリした頼り甲斐あるところに、それは通ずる。それから借金をにっこり笑ってことわったり、店を持って儲かるか儲からないか、よく考えたり、することのできるシッカリさである。

午後、電話があつた。

洋が会社からかけている。

「今晚、<sup>げん</sup>舷が泊らせてくれて。さっき連絡があつた」  
「ええわ、何時ごろ」